

入手・通読に好便なものは数少なくなつてしまつていた。しかるに最近、井上浩一著

『生き残つた帝国ビザンティン』（講談社学術文庫、二〇〇八年三月。初版、講談社現代新書、一九九〇年十二月）が装い新たに復刊され、加えてここに本書が上梓されたことは、「歴史の面白さ、人間の不思議さへと私たちを誘う格好の素材」（井上、前掲書、二七五頁）である。ビザンツ帝国史に対して、私たちの関心を一層高めてくれるはずである。

（A5判 九〇頁 二〇〇八年八月

山川出版社 世界史リブレット一〇四

税別七二九円）

（前巻泰輔 京都大学大学院文学研究科博士

後期課程・日本学術振興会特別研究員）

ロニー・ポチャ・シャール著（佐々木博光訳）

『トレント一四七五年

——ユダヤ人儀礼殺人の裁判記録——』

本書は一四七五年にトレントで起こつたユダヤ人儀礼殺人事件を、その裁判記録か

ら再構成、あるいは「再現」してみせた、非常に興味深い作品である。

この一般には耳慣れない「ユダヤ人儀礼殺人」とは何だろうか。それは古来からユダヤ人に対して言われてきた中傷の一つである。ヨーロッパでは中世以降、ユダヤ人はキリスト教を侮辱するために、キリスト教徒の男児を殺す儀式を行つていて、という話が広まつた。その最も古い証言は、一二世紀のイングラントまで遡ることができ。ユダヤ人に対するこの殺人疑惑は、ときには関与したとされるユダヤ人の処刑や虐殺を伴いながら、近代に至るまで猛威を振るい続けた。むろん現在では、この殺害疑惑がひとかけらの真実も含んでいないことは自明のこととなつてゐる。

中世を通してユダヤ人は、キリスト教徒に隠れて聖体のパンを汚しているとか、ペストが流行した時には井戸に毒を入れたなどと疑われた。このような反ユダヤ感情から生まれた数多くの疑惑のなかでも、儀礼殺人は最も古くからささやかれていた。そのため、中世の儀礼殺人疑惑に近代の反ユダヤ主義の萌芽を見ようとする動きもある。だが、儀礼殺人にそれほどの意味を付与す

る見解は賛否両論を呼んだ。ただ現在のところ、ユダヤ人に殺されたとされる者が聖者として教会等に祀られた場合、そこに地元の教会関係者の利害が深く絡んでいたことは、疑い得ないとされている。本書で扱われているトレントでの儀礼殺人事件もまた、そのような性質を帯びた事例である。

儀式殺人によって生まれた聖者がもたらすものは、このトレントの事件において重要な役割を演じている。ヨーロッパのキリスト教国では、キリストだけではなく、多くの聖者もまた信仰の対象となつてきた。そこには、ユダヤ人に殺されたとされる「殉教者」も幾人か名を連ねている。ローマ教会は各地で増殖し続ける聖人をコントロールしようと、一三世紀から列聖の手続きを整えて行つた。一四七五年にトレントでユダヤ人に殺されたとされた幼児シモンも、列聖訴訟の果てにローマの黙認にちかき承認を勝ち得て聖者となり、その名をアルプス地方や北イタリアに広め、長きにわたつて崇敬を受け続けた「殉教者」である。著者ロニー・ポチャ・シャールは、ヤシーヴァ大学博物館に所蔵されていたこのユダヤ人儀礼殺人裁判についてのドイツ語写本を

もとに、幼児シモンの死体発見を契機にユダヤ人一家の逮捕から拷問を含む審問、処刑へと至る様子を、シモンの列聖を求める大きな運動の中に描き出している。

本書の中心的な史料であるヤシーヴァ写本は、たしかに裁判記録なのだが、列聖訴訟を主導したトレント司教侯に対する不正疑惑を晴らす目的で編纂されたものであった。すなわちそれは、もともとの裁判記録の雑多な集積ではなく、心情的にトレント司教に荷担する編者による取捨選択が行われ、ユダヤ人の儀礼殺人が真実らしく映るように整えられていたという事情を持つテキストなのである。このある種厄介なテキストを使って事件を再構成するために著者が採用したのは、おもにイタリヤの歴史学者たちが親しんでいるミクロストリアの手法である。その手法により著者は作成した者の意図に逆らってテキストを読み、そこから複数の抑圧された声を丹念に聞き取ることに見事に成功している。

本書は以下の十一章からなる。各章ごとに、この訴訟に関係した者たちの綿密なバックグラウンドを織り込むことで細部に厚みを与えながら、本事件を発端から結末ま

で追う構成になっている。

- 第一章 司教侯
- 第二章 ユダヤ人社会
- 第三章 尋問
- 第四章 拷問室
- 第五章 「福者シモン殉教者」
- 第六章 死の劇場
- 第七章 教皇特使
- 第八章 血のエスノグラフィ
- 第九章 改宗者
- 第十章 おんなたち
- 第十一章 ローマの裁定

本書は、ユダヤ人が拷問の恐怖によつて、列聖に利害を持つ権力者の文脈に絡めとられて行く過程を、出来る限り詳細に、場合によつては蓋然性の高い仮説によつてふくらみをもたせながら、描き出している。

著者は、その結果当時のトレントのユダヤ人社会に内在した差別意識などが浮き彫りにされたことを、本書の功績として挙げている。たしかに、被尋問者の有していた言説を、尋問者の支配的な言説を通して見出せたことは、方法的にも意味のあることだろう。だが、本書の功績はまた別のところにもある。

著者はユダヤ人におけるわれた暴力を、反ユダヤ主義の一言で片付けること無く、その行為に至る理路を隅々まで解明している。それによりわれわれは、一四七五年のトレントでユダヤ人に降りかかった暴力が、どれほど圧倒的で理不尽であったのかを目のあたりにする。本書の最大の功績は、こうした暴力行為の理路を明らかにすることで、逆になぜこれほどの暴力が行われなければならなかったのかという根源的な問いを、読み終えた者に生じさせることにあるのだろう。

(四六判 二五六頁 二〇〇七年七月)

昭和堂 税込三三六〇円

(菊池智子)